

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	勝浦 美和
2. 審査委員	主 査：（鳴門教育大学教授） 浜崎隆司 副主査：（鳴門教育大学教授） 田村隆宏 委 員：（鳴門教育大学教授） 久我直人 委 員：（鳴門教育大学准教授） 内田香奈子 委 員：（兵庫教育大学教授） 名須川知子
3. 論文題目	幼児用自尊感情尺度の開発と保育実践への応用
4. 審査結果の要旨	先端課題実践開発専攻先端課題実践開発連合講座 勝浦美和 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査 日時：令和3年2月11日（木） 11時00分～11時45分 場所：リモート会議による審査（主催：鳴門教育大学 浜崎研究室） 1. 学位論文の構成と概要 第1章 問題の所在 自尊感情の定義と日本における子どもの自尊感情研究，現在確認されている幼児用自尊感情尺度を概観した。幼児用自尊感情尺度の開発においては，他者評価式が望ましいこと，また，保育者が，所要時間が短く日頃の幼児の姿が確認できる文言を用いて作成すること，さらに，保育実践での使用を目的とするため，単に自尊感情の高低について議論するのではなく，自尊感情を育む保育をどのように行うべきかという観点で捉え，保育の振り返りとして使用する姿勢を大切にすべきことが明らかになった。 第2章 幼児用自尊感情の尺度 開発の前段階として，保育現場における事例分析から，幼児の自尊感情が育つと思われる場面について確認した。次に保育者の持つ自尊感情のイメージには，〈認められる〉という共通のイメージと個人的特性や立場と関連したイメージがあり，それらが保育態度に繋がっていることが示された。さらに，4,5歳児の保護者と保育者から自尊感情が高い子どものイメージを自由記述で収集し，両者が共通して自尊感情が高いと感じる子どもは，主体性と社会性の両面をもっていることが明らかになった。そして，保護者と保育者から収集した自尊感情が高い子どものイメージを用いて因子分析を行い，2因子10

項目の他者評価式幼児用自尊感情尺度（保育者版）を作成した。信頼性において、 α 係数による内的整合性の確認、再現性調査により本尺度の安定性が確認された。また妥当性において、確認的因子分析によりモデルの妥当性が示された。さらに、各評定の高群と低群の平均値の差の検定により、基準関連妥当性が確認された。

第3章 保育実践への応用

介入内容の異なる教育群A、Bと対照群を設定し、本研究で得られた「自尊感情を育む保育における留意事項」と本尺度を用いて教育的介入を行った。教育群Aでは、個別インタビュー、教育群Bでは個別インタビューと園内研修を実施し、本研究での他者評価式幼児用自尊感情尺度の教育効果測定指標としての応用可能性と、効果的な介入内容について検討した。結果として、教育群A、B群における2元配置分散分析と個別インタビューおよび園内研修の質的分析から、効果的な介入内容として、園内研修が有効であることが示された。また、本尺度が、自尊感情を育む保育における教育効果測定指標として使用可能であることが証明された。

第4章 総合的考察

作成した幼児用自尊感情尺度は、所要時間が短く日頃の幼児の姿が確認できる文言を用いて作成したため、保育現場の実情に見合うものとなっただけでなく、自尊感情を育む保育実践を行う際の教育効果測定指標として有効であることが確認された。本尺度を用いることにより、毎日の生活や遊びの中でポイントを絞って幼児の姿を捉えることが容易になるとともに、共通の項目を用いて保護者や他保育者と対話を重ねることで、保育の省察に役立てたり、多面的な幼児の姿の読み取りに繋がったりすることが可能になることが示唆された。

2. 審査経過

審査は、主要研究成果と論文内容について審査を踏まえ、5人の審査委員により、以下の点について慎重に討議した。

（1）研究目的と論文構成の整合性について

本研究では、自尊感情を「ありのままの自分でよいと感じ、主体的に行動しようとする際の意欲を支える感情」と定義し、保育者が日々の生活から幼児のありのままの姿を気軽に確認することができ、自尊感情を育む保育実践の教育効果測定指標となる幼児用自尊感情尺度の開発を行うことを目的とした。また、幼児や保育者の実態から自尊感情を育む保育における留意事項を作成し、開発した幼児用自尊感情尺度と併用しながら保育実践に教育的介入を行い、教育効果測定指標としての応用可能性を実証するとともに、保育者の取り組みの変化を質的に検証し、効果的な介入内容について検討することを目的とした。本研究では、第2章で、保護者や保育者の求める他者評価式幼児用自尊感情尺度の開発を行い、さらに第3章では、他者評価式幼児用自尊感情尺度の教育効果測定指標としての応用可能性と、効果的な介入内容の有効性が示された。本研究は、以上のように科学的、論理的な根拠から実践へと研究展開が行われていることから研究目的に整合する妥当な論文構成になっていると認められる。

（2）研究の独創性と発展性および保育実践への貢献について

自尊感情を「ありのままの自分でよいと感じ、主体的に行動しようとする際の意欲を支える感情」と定義し、保育者が日々の生活から幼児のありのままの姿を気軽に確認することができ、自尊感情を育む保育実践の教育効果測定指標となる他者評価式幼児用自尊感情尺度を開発したという点では、これまでの関連研究を踏まえて先端的研究であり、独創性のある研究であるといえる。本研究の尺度のさらなる改善によって、ありのままの幼

児に向き合い，自己の保育を省察しながら，新しい保育を創造していく資料として使用することへの発展性も示唆される。また 幼児や保育者の実態から自尊感情を育む保育における留意事項を作成し，保育実践に介入することで本尺度における教育効果測定指標としての応用可能性を実証したこと，さらに保育場面での効果的な介入内容について具体的に示唆した点において，保育者養成及び保育実践において貢献度の高い研究であるといえる。

3. 審査結果

以上により，本審査委員会は，勝浦美和 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し，審査委員全員一致で合格と判定した。